「今日の説教、聴き手のために」　2011/12/25　明治学院教会（257）

「救いの筋道」（このプリントは毎週作っているものです）　岩井健作牧師

ヨハネによる福音書３章１６－１７節

1、先程のパワーポイントで見たクリスマス物語は、マタイ福音書の東からきた博士の話や、ルカ福音書の羊飼の話を総合して構成したものです。マタイは、神の律法に熱心であったユダヤ人が「救い主」の誕生に気づかず、遠くの異邦人の三人の博士（現代的には御用学者でない研究者）がイエスを捜し当てたと述べ、「灯台下暗し」とのメッセージを送っております。ルカ福音書は、イエスが、家畜小屋という普通の人の交わりからも外れたところで生まれとの物語を語り、イエスは貧しさの中にある人を慰めた、と「神の姿」の象徴を語っています。だから社会の最下層で働いていた羊飼いたち（ルカ福音書は金持ちへの警告を多く含んでいます）が、一番先に、救い主の誕生を知らされたのだというメッセージを持っています。

2、ヨハネは、美しい物語は持ちません。神学用語の理詰めですが、簡潔にイエス誕生の意味と筋道をまとめています。「神はそのひとり子を賜ったほどにこの世を愛してくださった」そうして「御子を信じる者は一人もほろびない」というメッセージです。「一人も滅びない」という事にことに焦点を当ててみます。

3、ロシヤの文豪ドストエフスイーの小説「罪と罰」の中で神の救いについて語られている場面の、マルメラードフという飲んだくれがいうセリフを思い出します。最後の審判で全部の者が裁かれた後、俺たちにもお言葉がある。「お前達も出てくるがよい！酒のみども、意気地無し、恥しらずども出てくるがよい」。すると智者、賢者はいう。「主よ、さらば何によって彼らを迎えん」そこで神様はおおせられる。「彼らのうち一人として、かつてみずから救いに値すると思いしものなきが故に・・・・・」そして神さまは御手をさしのべてくださるので、おれたちは地に平伏し・・・涙を流して・・・・すべてを悟のだ！主よ御国のきたきたらんことを」　自分は救いに値しないと思っているものが救われるというドストエフキー独特な逆説的救済観があります。自分の力では救いには至らない。救いは神の赦しと恵みによる。その関係の中にある自分を悟る（信じる）というのが聖書の救いの道筋です。

4、イエスはこの事を、全く別な表現で語ります。「あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくないものにも雨を降らせてくださるからである」（マタイ5:45）。イエスの振る舞いと生涯がつぶさに語られるのは、「神が世を愛してくださった」という真理を抽象化しないで、「身に染みて」分かるせる物語なのです。「身に染みて分かるように」という伝達の方法を神学的には「受肉」という術語で言い表します。別の言葉で言えば「一緒に苦しむ」「共に悩む」という事です。イエスの誕生、そして生涯の出来事の物語は、福音書という形の文学として、つまり「身に染みる」物語として伝承されたのです。クリスマス物語はフィクションの部分が多いのですが、「身に染みる」物語です。「身に染みてケーキを分けるクリスマス」被災地で詠まれた句です。家族が揃っていることは奇跡なのだ、という恵みの自覚があります。

5、南三陸町歌津字馬場の集落、中山センターのその後のお話、「福福号」のこと、村人の「我々には太平洋銀行がついている」という言葉には涙しました。